

リレー随筆

植物検疫の現場から(4)

ミバエ類の根絶と駆除確認調査

南西諸島に本格的な夏が訪れる6月下旬になると、沖縄県下の家庭菜園にはニガウリやヘチマがぶら下がり、真夏にはマンゴウやパンジロウがたわわに実っている。

このような風景がみられるようになったのは、ミカンコミバエとウリミバエの防除効果が上がり始めた頃からで、根絶防除事業は一般市民からの強い関心と協力によって着実に進められ、平成5年11月に八重山群島のウリミバエを最後に両ミバエの根絶に成功した。

今回は、沖縄県の特殊病害虫と植物防疫所とのかかわりを紹介したい。

昭和47年5月に沖縄県は本土復帰したが、ウリミバエやミカンコミバエなどの特殊害虫が発生していたため、植物防疫法によって沖縄県で生産される果菜類や果物などは本土などへの移動が禁止されており、沖縄農業は相変わらず外国扱いされてきた。

我が那覇植物防疫事業所では、これら特殊害虫が本土等の未発生地へまんえんするのを防止するため、移動取締りを行ってきた。空港や港で乗客に対して、「果物や野菜をお持ちではないですか。」と声をかけると一般旅行者からは「祖国復帰し、同じ国内であるのにどうして東京に持って行けないの。」との苦情が毎日のようにあり、そのたびに「ミバエ類が発生しているため禁止品です。」と理由を説明したのであった。快く植物検疫を理解してくれる人もいたが、なかには、果実を床にはおり投げ足で踏みつぶしたり、罵声を浴びせられることもたびたびであった。

植物防疫所では、このような取締りだけでなく、沖縄県産の農産物を本土へ出荷できるように、禁止品になっているサヤインゲン、ニガウリ、マンゴウなどの消毒方法の技術開発に積極的に取り組んできた。従来はEDBくん蒸剤を使用していたが、このような農薬を使用しない飽和水蒸気による蒸熱処理でミバエ類の卵や幼虫を殺す方法を開発して実用化され、特にサヤインゲンは冬春期野菜として大量に出荷された。また、カボチャ、スイカ及びトウガの3種類は、ウリミバエが寄生しているかどうかを植物防疫官が検査して合格したものだけが本土出荷された。

しかし、沖縄の農家にとっては、検査や消毒なしで自由に本土出荷できるようにするため、ミカンコミバエとウリミバエの根絶が長年の夢であった。

農林水産省は、昭和47年本土復帰とともに沖縄農業の振興を妨げているミカンコミバエとウリミバエを根絶するための防除計画を策定し、沖縄県によって防除事業が進められてきた。この事業は、関係者の粘り強い努力と協力によって進められ、ミカンコミバエは、18年の歳月と事業費50億円を投入し、昭和57年沖縄群島、昭和59年宮古群島、昭和61年八重山群島で根絶された。また、ウリミバエは、22年の歳月と事業費204億円を投入し、昭和53年久米島、昭和62年宮古群島、平成2年沖縄群島、平成5年八重山群島で根絶され、我が国から一掃された。

昭和56年4月に私が那覇植物防疫事務所の国内課に配置された頃は、沖縄群島のミカンコミバエの防除が終盤にさしかかっていた。広大な沖縄群島全域に、ミカンコミバエが1頭もいないということを証明する駆除確認調査が私の仕事であった。この調査は、ミバエ類の生育良好な時期を選定し、ミバエの生息の有無を確認するトラップ調査と、好適寄主である果実を大量に採集し、ミバエの寄生の有無を確認する生果実調査とを実施するものである。調査期間中は、那覇植物防疫事務所の全職員はもちろんのこと、県や市町村の職員の協力を得て実施してきた。本格的な駆除確認の前に、沖縄本島北部の山林地帯や、大きな面積を有する米軍基地内については、防除効果の事前調査を行う必要があり、情報収集や具体的な調査方法の立案などで忙殺される毎日であった。

那覇植物防疫事務所では、このような駆除確認調査を群島ごとにウリミバエで4回、ミカンコミバエで3回、合計7回実施した。幸いにして、駆除確認調査中にハブにかまれた者はいなかったが、八重山群島でミバエ類の専門家を現地案内中に、ハブに出くわし背筋が凍る思いであった。西表島の奥地は鬱蒼とした原生林に覆われ歩行困難な上に気味の悪いヒルが生息しており、十分注意していたにもかかわらず、知らぬ間に足は血だらけになっていた。また、島の南側には道路がなく、海岸沿いに腰まで潮に浸かりながら廃村になっている調査地点に辿り着くのに大変苦労した職員や、信仰心の強い宮古島では、島内に点々と神聖な拝所があり、この拝所内の防除や調査を実施するために、島民の協力と理解を得るのに苦労したこともあった。

沖縄県のミバエ類根絶を確認するための駆除確認調査は、平成5年に実施した八重山群島のウリミバエで終了したが、今後はミバエ類の侵入警戒調査体制の強化を図り、再侵入・定着を阻止し、真夏の炎天下や猛毒ハブの脅威を感じながらの駆除確認調査を再び実施しなければならない事態は、是非避けたいものである。

(那覇植物防疫事務所国内課 古波津 章)